



Title	矢田俊隆教授とスラブ研究施設
Author(s)	外川, 継男
Citation	北大法学論集, 29(3-4), 463-468
Issue Date	1979-03-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/16276
Type	departmental bulletin paper
File Information	29(3-4)_p463-468.pdf



矢田俊隆教授とスラブ研究施設

外 川 継 男

矢田教授は昭和三二年七月二五日付で北大法学部附属スラブ研究施設の併任教授となられ、同施設が昭和五三年三月三一日に廃されるまで、政治部門の研究員を二年の長きにわたってつとめられた。のみならず、スラブ研究センターの設立に際しては、その設立準備委員となられて、新しいセンターの人事や規程作成にも参画され、さらにセンター設立後は、その研究員及び運営委員となられて現在にいたっている。

スラブ研究施設は、昭和三〇年七月に創設されたが、この時研究部門として、歴史・文学・政治・経済・国際関係の五分野が定められ、その後昭和三四年に法律部門が追加された。設立当初この中の政治部門を担当されたのは、スラブ研究施設の創設にあずかって力あった北大法学部の猪木正道教授と、『ロシア革命史』の著書もある京大法学部の猪木正道教授の二人であった。しかし

尾形教授は、昭和三二年春に北大を去られると同時にスラブ研究施設の研究員を辞任され、そのあとを継いで矢田教授が政治部門の研究員になられたのである。

だが矢田教授がスラブ研究施設に初めてかわりを持つようになられたのは、これより一年前、昭和三一年七月の研究員会議の折であり、この時矢田教授は「独逸の三月革命とスラブ民族」というテーマで研究報告をされた。この報告を含めて、この時以後、矢田教授は計九回の研究報告をされているが、これらはいずれも、その後論文や著作となって結実することになる。以下においては、これらの研究発表を中心にスラブ研究施設との関連において、矢田教授の研究の足跡をたどることとする。

昭和三十三年一月 「一八四八年のスラヴ民族会議について」

前の報告にひきつづいて、矢田教授は一八四八年の革命時にあけるハプスブルク帝国治下の複雑な民族問題に焦点を合わされ、フランクフルトのドイツ国民議会およびマジヤール人のハンガリー議会に対抗して、ブラハで開かれたオーストリア領内の最初のスラヴ民族会議について詳細な報告をされた。元来矢田教授はドイツ近代史を専攻してきたが、この頃から多民族国家であるハプスブルク帝国の成立と崩壊という、わが国ではほとんど研究されることのない領域へと研究を進められるようになった。さらにその研究の過程で、教授の関心は、中・東欧のスラヴ諸民族の歴史へと次第に重点が移ってゆくことになるが、その意味からも、以上二つの報告は記念すべきものであったと言えよう。なおこの時の研究報告は、翌昭和三四三年三月に出版されたスラブ研究施設紀要『スラブ研究』の第三号に「ブラハに開かれた最初のスラヴ民族会議がヨーロッパ諸民族にあてた声明（訳及び解説）」と題されて印字になったほか、その後昭和四一年に吉川弘文館から発行された教授の著書『近代中欧の自由と民族』にも取められた。またこの時の報告とその前の報告とは、昭和五二年に岩波書店より出版された矢田教授の研究の集大成とも言うべき『ハプスブルク帝国史研究—中欧多民族国家の解体過程—』の第一部第二章「一八四八年革命とオーストリア・スラブ主義」となつて実を結ぶことになる。

昭和三七年二月 「独逸におけるスラヴ地域研究の現状について」

前回の研究報告のあと矢田教授は、昭和三五年八月から翌三六年一二月まで、文部省の在外研究員としてミュンヘンに留学されたが、これはその時の知見にもとづいている。周知のようにミュンヘンはオーストリアにも近く、「オストロイローバ・インステイトゥート」を中心として、東欧・東南欧研究のさかんな所であり、教授自身筆者に語られたところによれば、この時の留学がその後の研究に及ぼした影響はすこぶる大きかった。先にも触れたが、矢田教授の研究のそもその出発点は、マイネッケに導かれたつ、ドイツ国民国家の成立と崩壊の歴史をたどることにあつたが、すでにこの留学の前から教授の関心は東・中欧諸民族の「自由」と「民族」の問題に次第に傾斜しつつあり、むしろそのことが留学先としてミュンヘンを選ばしめたと言えるかも知れない。いずれにせよ、この留学の時代に矢田教授は、Hugo Hantsch「オーストリアの学者と個人的にも親しくなる機会を持たれ、このことは以後の研究に多大な影響を及ぼすことになった。なお、以下に述べるように、この報告以後、矢田教授は、アメリカ、西ヨーロッパ、東欧諸国におけるハプスブルク帝国史研究の歴史と現状をスラブ研究施設の研究員会議で報告されることになるが、これはその嚆矢となるものであつた。

昭和三十九年七月 「ハプスブルク帝国におけるフェデラリズムの問題」

前回の報告と今回の間に、矢田教授は「オーストリア社会民主党と民族問題」と題する論文を『スラヴ研究』の第七号に発表しておられる。この論文の中心テーマは、複雑な民族問題を抱えながら一八六七年に成立したアウスグライヒの歴史であったが、その評価をめぐってオーストリアとハンガリーの研究者の間に相違のあることが、この時の報告の中で早くも指摘されている。ハプスブルク帝国治下の民族問題は、ながきにわたって二重主義か連邦主義かという国制上の問題として論じられてきたが、近年になって、全体国家の果たした統合的機能の役割と限界を、あらためて問い直す傾向が見られるようになってきた。そこにおける問題意識は、資本主義たると社会主義たるとを問わず、いかにすれば多民族からなる広い地域を有効に統合し得るかという、第二次大戦後のECやユモコンの問題にかかわる、きわめてアクチュアルなものだと言うことができよう。この報告におけるフェデラリズムの問題提起も、このような学界の動向と無関係ではなく、さらに同様の問題意識から、スラブ研究施設は矢田教授を研究代表者として、昭和四〇年から二年にわたって「東欧におけるフェデラリズムの研究」と題する共同研究を組織し、文部省の科学研究費の補助金を受けて総合的研究を行った。

昭和四一年七月 「オーストリア・ハンガリー研究の現況——インディアナ会議に参加して——」

矢田教授はこの年四月から六月にかけて、アメリカ国務省の招待で米国各地の大学や研究所を視察されるとともに、インディアナ大学で開催された「一九世紀のハプスブルクの帝国における民族問題」というテーマの国際シンポジウムに参加された。アメリカはハプスブルク帝国史研究の分野では独・奥につぐ研究業績を有するが、特に近年は、ハプスブルク帝国の内包していた諸問題とその対応の仕方を、今日のアメリカの抱えている諸問題との関連において研究せんとする姿勢が顕著である。一方またアメリカの研究者は独・奥・洪の研究者に比して、ハプスブルク帝国の支配の直接的影響を受けることがなかっただけに、客観的立場を保持し、偏見をまぬがれることが可能であるとも言える。矢田教授は、このようなアメリカの研究を、研究史的に整理されて詳細な報告をされたが、それは翌年『スラヴ研究』の一号に「アメリカ合衆国におけるハプスブルク帝国史研究の近況」というテーマで公刊された。

さらに、この国際シンポジウムの時に矢田教授は、Charles Jelavich, Andrew Whiteside とした米国の研究者をはじめとして、ハンガリーやチェコの学者とも親しくなることができたが、このことの意味も決して小さいものではなかった。日本の外国史研究の上で、とりわけ今日において、このような研究者同士の個人的親交の持つ意味はすこぶる大きいと言わなければならない。

らない。スラブ研究施設にも、昭和四〇年頃より外国人研究者の訪問がようやく頻繁になってくるが、時としてこれらの人びとが研究報告をする機会も生じてきた。なお矢田教授自身の研究に関連して言うならば、この頃より従来にまして、ハンガリーの研究にいつそう注目されるようになってきたように思われる。

昭和四三年一月 「第一次大戦とハプスブルク帝国」

この年一〇月、矢田教授は文芸春秋社より『大世界史』シリーズの第一七巻として、『自由と統一をめざして』と題する著書を出版された。これはウィーン会議からベルリン会議にいたる一九世紀ヨーロッパの通史とも言えるものであるが、類書に比して、ロシアや中・東・南欧といった従来軽視されてきた地域に多くの紙幅がさかれているところにその特徴があった。歴史家の最後の仕事はすぐれた通史を書くことにあると言つてよいだろうが、自らの専門とする領域における、きめこまかな研究論文を書かれる一方で、このような概説をも執筆されるところに、歴史家としての矢田教授のすぐれた一面を見ることができよう。なおこのことに関連して、矢田教授のマイネッケの翻訳についても、同様のことが言われるべきであろう。

ところでこの通史が第一次大戦前夜で終わっているのに対し、この時の報告はオーストリア・ハンガリーの歴史の最後の局面を扱ったものであった。その後この報告は、昭和四五年に「オーストリア・ハンガリー帝国の崩壊」という題で岩波講座『世界歴史』

の第二四巻に発表されたほか、矢田教授の編集になる山川出版社の『東欧史(新版)』(昭和五二年)の第三章第二節及び教授の最近作たる『ハンガリー・チェコスロヴァキア現代史』(昭和五三年、山川出版社)の冒頭の部分としても発展させられたのであった。

昭和四六年七月 「西ヨーロッパにおけるハプスブルク帝国史研究の近況」

矢田教授の研究に一貫して見られる大きな特徴は、研究それ自体の歴史を詳細にたどり、個々の主要な業績を研究史の中で位置づけられるとともに、研究の流れや傾向をも適確に把握せんとする姿勢である。

先のアメリカにおけるハプスブルク帝国史研究について、今度はイギリス、フランス、イタリア、ドイツ、オーストリアといった西欧諸国の研究が報告された。そしてこの時の報告は、翌年三月に発行された『スラヴ研究』の第一六号に同じタイトルで活字になった。

このようにハプスブルク帝国史研究が欧米においてさかんになってきた背景には、ハプスブルク帝国の解体後半世紀余経過した今日においては、帝国内諸民族のナショナルイズムが、それ自体として歴史的考察の対象となり得るようになってきた事実が、まず最初に指摘されよう。さらに、先にも述べた如き、ハプスブルク帝国の持っていた諸民族の統合の機能というのが、現代とのかか

わりにおいてアクチュアルな問題となってきたという事実も強調されなければならぬ。これと関連してスラブ研究施設は、矢田教授を研究代表者として、昭和四五年から三年間にわたって、今度は「ロシア・東欧におけるナショナリズムの諸問題」という共同研究を組織し、文部省の科学研究費補助金を得て総合研究を行った。また、この頃から北大外の研究員の交代が行われるようになり、猪木正道、岩間徹、江口朴郎、金子幸彦といった設立当初からのメンバーが退任されて、研究プロジェクトを中心に三年を一期とする期限をもうけて、新しい研究員が加わるようになった。やがてその中には、ユーゴスラヴィアの国際関係の専門家である木戸藝、ハンガリーの近・現代史の南塚信吾、ポーランド政治家の宮島直機といった、東欧に留学した経験をもつ専門家が含まれるようになり、これらの新進気鋭の研究者と、昭和四九年からスラブ研究施設の専任研究員となったポーランド現代史の伊東孝之助教授らによって、矢田教授の編集された『東欧史（新版）』が執筆されるようになる。

昭和四九年七月 「オーストリア・ハンガリー帝国の構造と特質―ハンガリーの立場を中心に―」

矢田教授のハプスブルク帝国史研究は、この頃からハンガリーに重点が移り、しかもその際に現在ハンガリー歴史学界の第一線で活躍している研究者の最新の成果が積極的に取り入れられるようになった。以前のハンガリー史家の著作は、とすればイデオ

ロギー性が強く、科学的分析という観念からは多くの問題があったが、ペーレント、ラーンキ、カトゥスといった最近の研究者の客観的研究は、史料操作の上でも手がたいものであって、しかも彼らはハンガリー語のみならず、英・独・仏・露語でも積極的に業績を発表しており、矢田教授はハプスブルク帝国史研究をより包括的且つ緻密にするために、これらの研究業績を取捨選択されたのであった。なお、この時の研究報告は「オーストリア・ハンガリー二重帝国の構造と特質（一）〜（四）」と題されて、昭和四九年一〇月発行の『北大法学論集』の第二五巻第二号以下につきつぎに発表されることとなった。

昭和五〇年一月 「ソ連・東欧学術調査旅行を終えて」

スラブ研究施設は昭和四八年から三年にわたって、矢田教授を研究代表者として「ソ連社会の変遷と対外関係」と題する特定研究の組織を作り、昭和四八年度には日南田静真教授（ロシア経済史）をソ連及びヨーロッパの学術調査に派遣したが、昭和四九年度には矢田教授と伊東助教授の二人を同じ目的でソ連と東欧へ派遣した。矢田教授は同年九月六日から一カ月にわたって、ソ連、チェコ、ポーランド、ハンガリー、ルーマニア、オーストリア、西ドイツなどを旅行されたが、これはその報告である。このたびの調査旅行はきわめて短期間である上に、訪れる国が多かったにもかかわらず、矢田教授はきわめて活動的に各地をまわられ、その精力的な行動ぶりは今日でも話題になっている。一見ひよわそ

うであるのに、矢田教授は、旅行巧者として知友のあいだに知られている。この時にもチェコやハンガリーにおいて、矢田教授は多くの大学・研究所を訪問され、旧知の学者をはじめて会った研究者から多くの情報を得られた。

以上九回にわたる矢田教授の研究報告を中心に記したが、最後に「北海道スラヴ研究会」との関係について触れて結びとしたい。

昭和四五年四月に、北大のみならず道内各地のソ連・東欧地域を研究対象とする人びとによって北海道スラヴ研究会が設立され、ひろく大学の枠をこえて研究の交流がはかれるようになった。この研究会は原則として毎月最終月曜日の午後五時から七時まで定期的に研究会を開催するほか、時として道外の研究者や外国人学者による特別講演会も行ってきた。矢田教授は設立当初からきわめて勤勉な参加者であられたのみならず、昭和五一年五二年度の二年にわたって、この研究会の代表をつとめられた。

スラヴ研究の如き、若く、しかも学際的な分野においては、他の人びとの研究を理解するための広い視野とともに、共同研究をスムーズに運営するための良識が強く要請される。矢田教授はこのような視野と良識を兼ね備えられた学者として、ひとり北大のスラヴ研究施設にとつてのみならず、わが国のスラヴ研究に多大な貢献をされたのであった。

(一九七八・一〇・九)